

二〇〇四年

一月一日

一時磯崎宅を辞し、二時世田谷村に戻る。

十八時迄うたた寝。正月のTV番組は流石に馬鹿馬鹿しくて見てられない。三月の沖繩ワークショッップの前後に上海での展覧会の準備を進めたい。上海スタジオGの常設と、展覧会及びパブリシティのプログラムを工夫してみる。李祖原、登混艶とのコラボレーションは欠かせない。一月の沖繩行は同時に上海行をセツトしてしまおう。上海に居る外国人による「上海スピリッツ」が中心的起点になるだろう。先ず上海在住、あるいは上海長期滞在中の外国人の知り合いを何かの手段で作らなくてはならぬかな。そんな事簡単に出来るわけもないが。

一月三日

「老子」読み始める。正月世田谷村で過ごしていた八十四才になる母親が緑町に戻るといので、送りがてら、父親の書齋から数冊本を持ち帰った。亡くなったオヤジの書齋は中国文献が多いから、その本を少しづつ読み進めてみる。だんだん父親に似て来る部分があるようだ。昨日は調布の保安神社に初詣し、その足で栄寿司で新年会、だいぶ飲んでしまった。今日は母親から大分説教されてしまう。今年は私は厄年であるらしい。酒が鬼門だな。母親を本格的に世田谷に迎える為に、書庫等の工事を早急に進め

なくてはならぬ。夜たわむれに金子光晴の「ほりだしもの」読む。この人のアナーキスト振りは本格的だな。辻潤、宇野浩二も登場する、色話し集である。山本夏彦の匂いに近いものがある。フランス新著聞集が凄味があつて面白かった。パリの娼婦の話で、「じゃあ、私、邪魔なものは、みんなとっちゃうからね」と、義足、義手、義眼を取り外してゆく、髪の毛もひっぱると、すばんと抜けて、かつらであった。白髪の小輪の老女が現れるという話。金子光晴の話は日本での話しは全て彼程に乾いてハードな感性をもつても湿気を帯びているのだが、パリの話しは面白い。何がそうさせているのかな。金子は確か上海にもしばらく遊んだ筈だが、その阿片体験記のようなものがあれば読んでみたい。「魔都上海」読了。後半の明治以降の日本文学者の上海が少し喰い足りぬ感あり。金子光晴の上海体験は彼のパリ体験と共通するデカダンスに根を持つものであつた事が解る。彼の「どくろ杯」は読みたい。今の上海に金子光晴のかぎとつた匂いがあるかどうか、芥川龍之介が反撥した近代化上海以上のものが、あるのかどうか、まだ解らない。上海に無ければ何処にも無いのかもしれぬし……。